



⑭ あかちゃんのドレイ。2

前回に引き続き、大久保ヒロミさんの『あかちゃんのドレイ。』（講談社 ①～⑥ 2006-2010）を紹介します。「ドレイ兼漫画家」の母ピロミ、天然キャラで「戦力外」の父ピロキ、そして「2LDKの女王様」ヒヨ子。今回はヒヨ子が1歳になるまでのエピソードを紹介しました。

乳幼児がいる家庭は、24時間365日、ずっと子どもに振り回されるようなもの。在宅ワークの漫画家ピロミは、仕事の打ち合わせ中にも、たびたびヒヨ子に中断させられてしまいます。

そんなある日、郵便受けに入ったチラシには「新しい保育園が開園」と書かれています。しかも自宅の近所。翌日、見学に行ったら即入園が決定です。このスピードから推察するには、認可外保育園のようです。

その次の日、ピロミはさっそくヒヨ子を連れて保育園に向かいます。出迎えた保育士から「今日はならし保育なので3時間後をお願いします」と告げられ、ヒヨ子だけ保育室に向かいます。

「3時間もあかしひとりの時間...！」ピロミは喜びを隠しきれません。今日は原稿用紙を食べられたり、打ち合わせの電話を勝手に切られたりすることがないはず。だれにも邪魔されないと、仕事のはかどり方が違います。

「ならし保育」にどれくらいの時間を使うかは、園の方針だけでなく、園児さんの年齢（月齢）、発達の様子によっても大きく異なります。4～5歳児であれば、数時間で環境に慣れ、遊び集団になじんでしまうことも珍しくありませんが、0～1歳児ではそれまでずっと過ごしてきた家庭環境からいきなり全てが変わってしまいます。親が1対1で対応してくれて

いた家庭生活では、すべてが自分優先で回っていましたが、保育園では子ども集団に数人の保育士が対応することになります。子ども自身がたとえ理解できなくても、順番やゆずり合いを求められる場面も出てきます。おうちのルールと保育園のルールは全く違い、言葉も通じません。泣いてもすぐには理解してもらえません。子どもにとって家庭生活から保育園生活に変わることは、まるで「外国に行くようなもの」なのです。

筆者が園長をしていた保育園では、0歳児の「ならし保育」にはできるだけ、保護者が一緒に保育室に入って数時間を過ごすことからはじめていました。翌日は同じ時間を園児一人で過ごし、お昼ご飯の前まで、お昼ご飯の後まで、お昼寝をした後まで...と徐々に滞在時間を延ばして様子を見ながら、保護者が希望する保育時間いっぱいまで利用できるようにしていました。

さて仕事に専念していたピロミは時計を見て、ふと気になります。「ヒヨ子…今ごろなにしてんのかな…突然知らない大人の中に放り込まれて、振り向けば母はいなくて、泣いてるかなあ…」

ママ友と電話をしながらも、自分の幼少時の切ない思い出を話してしまおうピロミ。「本当に寂しいのはあたしだった…」。

長い長い3時間を過ごし、保育園に走ってお迎えに行くピロミ。「ヒヨ子迷惑かけてませんか、泣いてますか」と涙目で保育室に入ります。しかしヒヨ子は母親をチラっとみただけで、おもちゃでの遊びに集中しています。むしろ帰りたくない様子です。

「ならし保育」の際、保育士は新入園児の情緒の安定に注意を払います。安心安全に過ごせる場所であることを示し、まわりの子ども達と打ち解けられるか、突発的なトラブルがないか等に注意をしながら時間を過ごします。

このエピソードからは、「ならし保育」は新入園児のためだけでなく、保護者のためのものでもあるのだと気づかされました。保護者もまた、ずっと一緒にいたわが子と離れる時間に適応しなければならないのです。保育士には、保護者に子どもの様子を報告するだけでなく、寂しくなってしまう保護者の気持ちにも寄りそうことが求められるかもしれません。

その後、2歳半になったヒヨ子は認可保育園に通っています。ある日、お迎えに行ったピロミのもとに保育士が連れてきたヒヨ子は、ほっぺたにかすり傷をつけています。「やっばりきたー！」と顔色を変えるピロミ。生まれたときから態度がでかかったヒヨ子が、「保育園でおとなしくしてられるのか？」とかねて心配していたのです。保育士は「すみません、今日お友達とおもちゃの取り合いをして…」と平謝りです。ピロミの心配とは裏腹に、「相手の子がおもちゃを取り上げるときにちょっと顔に当たってしまって」という説明です。

「いじめる側じゃなくてよかった」と安心したのもつかの間、数日後には引っかかれたり、

押されてコケたり、生傷が増えていきます。ついに噛みつき被害にあってしまったヒヨ子。お迎えに行くとヒヨ子の左腕には湿布が貼ってあり、「りょうちゃん、ガブちた」と話します。

自宅に帰って湿布を貼り替えようと取ると、ヒヨ子はおもむろに泣き出します。残っている歯形を見てピロミが「相当痛かったんだ…」とうろたえていると、ヒヨ子は湿布を取り返して自分の左腕に貼りなおします。なぜかヒヨ子は貼りなおした湿布にご満悦。「あたりだけがしゅんしゅんにしゅぶはってもらったんでちゅよ」とセリフがあります。泣いたのは何だったのでしょうか？

2歳頃までの子ども達の関わりの中では、おもちゃの取り合いなど些細なことから、ひっかきや押したり引っ張ったり、傷ができるようなことが起こります。噛みつきもそのひとつですが、大人の感覚ではとても恐ろしい事のように感じられてしまいます。筆者も保育園勤務の際、お預かりしていたお子さんが噛みつかれてしまい、保護者の方にお詫びと説明をしたことがあります。お父さんが納得されず「ここは保育園だと思っていたが、動物園ですか!」と言い捨てられたことを記憶しています。お預かりしたお子さんに傷をつけずに保護者のもとにお返しすることは保育の基本ですので、責められて当然のことです。特にその場面を見ておられない保護者の方は、「噛みつかれる」という場面を想像するしかないのも、感情的な強い反応になられたのだと思います。

しかし乳幼児は色々なものを口や鼻に入れます。親密さを表現しようとして手や指で触れることがあります。小さな子どもにとって噛みつくことは触れることと意外なほど近いものです。親密なお子さんどうしほど、噛みつきが発生したりします。

歯科医師で保育者養成校の教員でもある岩倉（2015）は噛みつきの要素として反射的な「防御」、欲求不満の「攻撃」、嫌な相手への「拒否」だけでなく、好きな相手を取り込もうとする「同化」の噛みつきがあることを指摘しています。好きな保育者や友達を甘噛みするのですが、拒否されて噛み方が攻撃的になってしまうこともあるのです。

作中でもヒヨ子と、ヒヨ子を噛んだりりょうちゃんはとても仲良しで、ピロミが問いかけるとヒヨ子は「(りょうちゃんのこと) しゅきー」と満面の笑顔で応えています。

もちろん保育士は子どものケガを防ぐ必要がありますが、遊びのじゃれ合いとケガはとても近いのです。保育環境の見直し、子どもの人間関係や保育場面の転換への注意など、様々な工夫があっても、噛みつきやケガをゼロにすることはかなり難しいことです。

さてヒヨ子は、ピロミが湿布を貼りかえようとした場面でなぜ泣いたのでしょうか？ 筆者は、ヒヨ子にとっての湿布は、「保育士の愛情のシンボル」だったのではないかと考えます。ヒヨ子だけが先生に湿布を貼ってもらったのだから、「これは特別な湿布だ」とヒヨ子が思ったとしても不思議ではないでしょう。ピロミは傷の具合を確認して新しい湿布に

替えようとしたのですが、ヒヨ子は「特別な湿布」を取られたくなかったのでしょう。

保育中のケガや体調不良の対応場面では、保育士との1対1の関わりや、湿布、絆創膏など目に見えるものをつけてもらうことが、子ども達の愛着形成に役立っていることを感じられます。ケガや体調不良はない方がいいと感じるのが自然ですが、それによって見守られている安心感や気にかけてもらえている満足感も子ども達は得ているものなのです。

紹介作品:久保ヒロミ(2006~2010)『あかちゃんのドレイ。①~⑥』講談社

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

参考文献:岩倉政城(2015)『かみつく子にはわけがある』大月書店,pp.72-83